

# 自我体験を経たことによる意味の内容に関する質的分析

The qualitative analysis of the meanings people attach to having the “ego-experience”

天谷 祐子

Yuko AMAYA

キーワード：自我体験、自我体験の意味、質的分析

Key words : ego-experience, meanings attached to ego-experience, qualitative analysis

## 【要旨】

本研究は、「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—を経た人の中で、自身の自我体験に関する意味づけの内容を質的に分析したものである。天谷（2004, 2005）による中学生から大学生までの調査対象者の中で、自我体験を経たと判定され、かつその意味について自由記述を求めた回答 381 記述を分析対象とした。その結果、20カテゴリが見出され、うち15カテゴリがポジティブなものであった。また自我体験を経たことによる意味づけの内容は、中学生・高校生・大学生の間で違いは見られなかった。さらに、自我体験による意味づけの具体的内容は、自分自身についてだけでなく、他者や社会との関係、脳・哲学といった他分野への思考、視野の広がりといった認知的な変化など自分自身以外の領域にも思考や興味が広がることが示された。以上から、自我体験を経ることにより、自我体験に見られる問いの答えは得られないけれども、多くの領域の思考や興味に影響を及ぼす可能性が示唆された。

## 【Abstracts】

This study aims to categorize the meanings people attach to having an ego-experience, and to investigate developmental changes in the categories. Ego-experience is defined as an incidence of asking questions about “I,” such as “Why am I the person I am?” 20 categories were derived from 381 statements by the data of Amaya (2004, 2005). 15 categories covered positive meanings, 3 covered neutral meanings, and 2 covered negative meanings. The 15 positive categories were subdivided into 5 groups relating to self, society and others, cognition, thinking about other domains, and miscellaneous. There was no difference in the frequency of the categories for junior high school students, senior high school students, and undergraduates. The study showed that the meanings people attach to having an ego-experience expand their thinking about the domains of

society and others, cognitive changes, and the domains of the self. It would seem that having an ego-experience influences several domains of thinking, although there is no definitive answer to the value of an ego-experience.

### 【問題と目的】

本研究は、小学校後半から中学にかけて見られるとされる「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—を経た人に対し、自身の自我体験に関する意味づけに関する自由記述を求めて得られた内容をカテゴリ化し、自我体験を経ることによる意味の具体的なバリエーションを明らかにするものである。また自我体験を経た直後の世代である中学生から、自我体験を経て時間が経っている大学生までの意味づけの内容に変化が見られるかどうかを検討するものである。

自我体験に見られる問い、例えば「私はなぜ私なのか」という問いに関しては、客観的な回答は存在しない。このことから、自我体験に見られる問いに取り組むことは全く意味がないとみなしても良いのだろうか。天谷(2004a)の調査結果では、自我体験を経た人のうち6割から7割の人が、自身の自我体験について「意味はない」とみなしていたが、「意味がある」とみなしていた人の中には「人間や人生について考えた」という記述が得られている。つまり、自我体験はすべての人にとって明確な意味が見出せるものではない可能性があるが、一部かそれ以上の人にとっては何らかの積極的な意味があるものと捉えることができる。また自我体験を経る際、その深刻さは人によって異なるのだが(天谷, 2002)、その時期の中心的な関心事として深刻に考えている人にとっては、問いに取り組んだ経験について、自身にとって意味あるものと捉えたい心の働きが生まれる可能性もある。

自我体験を経たことによる意味の内容の種類に関する実証的研究は、先行研究ではほとんど見られず、意味づけの内容に関する部分的な抜粋にとどまっている。例えば天谷(2004a)が自我体験の意味づけの自由記述例を3ケース(「自分を見つめることができた」、「考えが広がっていくようになった」、「人間や人生について考えた」)、天谷(2002)の面接事例から自我体験前後での変化の内容を3ケース(「よく考えるようになった」、「自分が成長した」、「普通の考え事と同じで何も変化はない」)紹介している。また天谷(2001, 2004b)における面接事例において、自身の自我体験について「意味があったかなかったか」というたずね方で被面接者からあいまいではあるがコメントを得ている。以上のような抜粋だけでは、自我体験を経たことによる意味づけのバリエーションの代表的なカテゴリなのか否かは明らかにできない。従って、実際に自我体験を経た人に対して、自身の自我体験による意味づけの内容を自由記述にて求めた回答を分析し、ボトムアップ的にその内容のバリエーションについて明確化していくことが必要である。

また、自我体験の客観的な発達の意義・位置づけを明らかにしていくことは非常に重要である。例えば、自我体験を経ることで、児童期後半から青年期の彼らのどのような心の働きや行動(心

理的要因)に影響を及ぼしているのか、を明らかにすることが今後望まれる。その具体的な心理的要因を明らかにする1つの手段として、自我体験に意味を「自覚的に」見出した人の記述を分析してカテゴリを明確化することは有用である。ただ、自我体験を実際に経験した人がどのような意味づけを実際に行っているかということと、自我体験を経ることによる発達の意義とは、多少区別しながら慎重に考察していく必要がある。本研究では被調査者の主観的な記述を分析対象とするが、客観的にそれが正しいかどうかという議論はひとまず棚上げする。そして、自我体験を経た人自身の自覚的な意味づけの内容が、自覚的でない人をも含めた中の代表的な現われであるという観点から論を進めることとする。

以上より、本研究の目的の第1として、自我体験を経たことによる意味づけには具体的にどのようなカテゴリが存在するのかということを探索的に検討する。そして、具体的にどのカテゴリが割合として多く見られるのかを明確化する。

さて、天谷(2004a)の中学生から大学生を対象とした調査からは、自身の自我体験に意味を見出していた人の割合について、中1と中2ではややその人数は少なく、大学生では多いことが見出されている。そこからの仮説として、自身の自我体験の初発直後よりも、ある程度時期を経た後に意味を見出すのではないかと天谷(2004a)は指摘している。また、中学生よりも大学生の方が、自身の経た体験と自身の周囲の事象を有機的に関連づけて考えたり、視点を相対化したり多面的に意味づけたりする能力に長けている可能性が高い。それにより、自我体験を経ることによる意味づけの程度だけでなく、意味づけの内容についても発達の違いが見られる可能性が考えられる。そこで、本研究の目的の第2として、自我体験を経ることによる意味づけの内容について、発達の推移が見られるのではないかとということを検証する。本研究では、意味づけの記述を学校段階別に分けて、意味づけのカテゴリの発達の相違を調べることにより検証する。本研究の2つの目的により、自我体験を経ることによる主観的・客観的意義に関する今後の具体的な道筋の可能性を探ることができると考えられる。

## 【方法】

●質問紙：天谷(2004a)、天谷(2005)による自我体験に関する質問紙調査から得られたデータを使用した。本研究における分析対象となる質問紙の内容は、自我体験に関する質問項目15項目(1.自分はどこから来たのだろうか、2.自分はどこへ行くのだろうか、3.自分は何だろうか、4.自分は誰だろうか、5.一体何をもって「自分」としているのか、6.自分の正体って何だろうか、7.自分の存在そのものが不思議だ、8.自分は本当に自分か、9.自分はなぜ自分なのだろうか、10.だれでもなく、どうして自分なのだろうか、11.自分が自分であることが不思議だ、12.なぜ私はこの体をえらんだのか、13.私が私としてでなく、他のだれかとして生まれたということもありえたのに、どうして私となっているのだろうか、14.いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろうか、15.自分はな

ぜ、他の国や他の時代ではなく、日本の、この時代に生まれたのか)に対して「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」、「何となくあったような気がする」、「思ったことがない」、「わからない」の5件法のうち1つを選ぶよう求め、1項目以上「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」、「何となくあったような気がする」のいずれかを選択した被調査者に対してその具体的内容を自由記述にて求めた部分である。さらに、その体験内容に関して「経験した意味」を具体的に自由記述にて求めた部分である。この部分は天谷(2004a)においても天谷(2005)においても項目は同じであったが、天谷(2004a)については自我体験に関する質問項目を3セクションに分けてたずねたので「経験した意味」が各セクションごとに設定されていた。

●**調査時期**：天谷(2004a)のデータ(中学生・高校生・大学生)は1997年9月、天谷(2005)のデータは1997年11月(中学生)、1998年6月(大学生)であった。

●**本研究の分析までの手続き**：各被調査者の自我体験に関する質問項目の評定と自由記述内容の質的分析から、全ての被調査者の記述が自我体験とみなせるかどうかを判定した。ここまでの手続きは天谷(2004a)・天谷(2005)における分析にて明らかとなっている。その後、自我体験を経たとみなされた記述のみを取りあげ、体験の意味の記述が見られたデータのみを抽出した。さらに、「わからない」「(意味は)ない」という記述は分析対象から除いた。

●**分析対象**：本研究において使用するデータの調査対象者は1348名(男性621名、女性727名)であった。うち、天谷(2004a)における調査対象者は、中学生424名(男性200名、女性224名)、高校生307名(男性133名、女性174名)、大学生150名(男性78名、女性72名)、合計881名であった。また天谷(2005)における調査対象者は中学生239名(男性127名、女性112名)、大学生228名(男性83名、女性145名)、合計467名であった。天谷(2004a)における中学生から大学生までのデータについては3セクションに分けられているので、自我体験とされたデータは1人の被験者に2つの自我体験という場合も存在する。これらの調査対象者のうち、自我体験を経たとされたのは、のべ880名(記述)であった。さらにその中から自我体験を経た意味に関する自由記述が見られ、その内容が「わからない」「(意味は)ない」という記述を除いた記述は、合計381記述であった。学校段階別の内訳は中学生は144記述、高校生は69記述、大学生は168記述であった。

●**分析**：(a)カテゴリの設定：菅野ら(2009)によるインタビューの語りデータからカテゴリ算出までの手続きを参考に、カテゴリ設定を行った。自我体験を経た意味に関する自由記述内容が豊富であると想定される大学生のデータのうち、半数にあたる84記述の各々について、その記述を表すと思われる短いカテゴリ名をラベリングした。その結果、36のラベルが設定された。次にその36のラベルの内容的な類似性に基づいて20のカテゴリにまとめられた。その20カテゴリについて、内容的に「ポジティブ」、「ネガティブ」、「ニュートラル」、「ミックス」の感情に分類した。また20のカテゴリの中で「ポジティブ」に分類されたものについては、カテゴリ数が多いので、領域が類似していると思われるカテゴリをまとめあげ、上位カテゴリを作成した。最後に各感情

ごとに「その他」というカテゴリを含め、カテゴリの設定を終えた(Table1 参照)。各カテゴリの具体的記述例は Table1 に示した。

Table 1. 分類カテゴリの生成とその内容

		内容	
ポジティブ	自己	自己理解	自分の内面を見つめはじめた(大学生女子)
		自己存在の実感	自分という人間が存在することを実感できた(大学生男子)
		自分らしさの模索	自分らしさを見つけようと思ったことに意味があると思う(大学生男子)
	社会・他者	自己・他者関係の理解	自分の存在を考えることによって他人の存在についても考えが及び、人対人のかかわりについてほんやりとした考えをもてたと思う(大学生男子)
		進路・生き方を考える	将来の夢が決まり、それに向かってがんばろうと思った(大学生女子)
		出会いの重視	人との出会いを大切にしようと思った(大学生女子)
	認知	視野の広がり	自分の世界が少し広がった気がする(大学生女子)
		わからないものの存在	考えてもわからないものがあるんだと思った(大学生男子)
		客観的視点	自分を客観的にとらえ、全体の中の相対として自分を認識する(大学生男子)
		考えることが意味	永遠に結論の出ない問題とは思うけど考えることに意味がある(大学生女子)
	他分野への思考	生命・人生を考える	これっきりの人生なんだから精一杯生きようと思ったのでよかったと思う(大学生女子)
		脳・哲学・輪廻への興味	脳について考えたり哲学の本を読んだりしはじめた(大学生男子)
		運・偶然	偶然とか運命とかについて考えるようになったと思う(大学生女子)
	その他	充実した日々への努力	充実した日々を送ることに努力しはじめた(大学生男子)
感謝		今生まれていなかったらあえなかった人のことを思うと今生きていることに感謝(大学生女子)	
	その他		
ニュートラル	通過点	誰でも通る通過点(大学生女子)	
	不思議さの実感	人間の不思議さを感じられた(大学生女子)	
	心身分離の意識	身体と精神の遊離を感じた(大学生男子)	
	その他		
ネガティブ	自己拡散	とりあえず自信をなくした(大学生男子)	
	あきらめ	考えても仕方がないと悟った(大学生男子)	
	その他		
ミックス	上記3つのうち2つがミックスされたもの		

(b)全ての分析対象を分類：設定された20のカテゴリを使用し、(a)においてラベリングした大学生のデータを含めて全てのデータについてラベリングした。記述の多いデータについては複数のラベリングも可とした。20のカテゴリにあてはまらない記述内容については記述内容の感情を判断したうえで、「ポジティブ」・「ネガティブ」・「ニュートラル」のいずれかにおける「その他」に分類した。全てのデータについて分類を終えた後、学校段階別に各カテゴリの出現頻度を算出

した。これら全ての作業は筆者が1人で行った。

## 【結果と考察】

### (1) カテゴリの種類について

本研究による分析から、自我体験を経た意味の種類が20カテゴリ見出された(「その他」を除く)。感情的にはポジティブなものが15カテゴリ、ネガティブなものが2カテゴリ、ニュートラルのものが3カテゴリ見出された。

さらに「ポジティブ」の15カテゴリについては、解釈を円滑に行うため、さらに5つの上位カテゴリにまとめられた。第1の上位カテゴリは「自己」である。この上位カテゴリは「自己理解」、「自己存在の実感」、「自分らしさの模索」の3下位カテゴリから構成されている。3つの下位カテゴリにおける「自己」・「自分」の内容は、自我体験によって問われている「自分」とは異なるものである。「自己理解」における「自己」とは、自分自身の内面や「自分はどのような性格を持っているのか」といった問題を扱うものである。また「自己存在の実感」における「自己」は「個」としての自分という位置づけである。さらに「自分らしさ」とは、青年期に見られるアイデンティティの問いのようなものを指す。このように、ここの上位カテゴリにて問題とされている「自分」の内容はそれぞれ異なるけれども、大きく見るといろいろな水準で「私」というものについて意識したり考えたりしていると考えられ、1つの上位カテゴリとしてまとめるに適切であると判断された。つまりこれは、自我体験における問いにより、いろいろな水準での「自己」について考えるようになったという意味づけの上位カテゴリである。この点について、天谷(2005)は自我体験を経た大学生群について、自我体験と私的自己意識の間に正の相関を見出している。つまり、自我体験を経た群は、自身の自我体験に意味を見出したかそうでないかに関わらず、私的自己意識が高い。一部の主観的な意味づけのカテゴリであるが、この天谷(2005)の知見はこのカテゴリの妥当性に関する客観的な傍証とも言える。

第2の上位カテゴリは「社会・他者」である。この上位カテゴリは「自己・他者関係の理解」、「進路・生き方を考える」、「出会いの重視」の3下位カテゴリから構成されている。いずれの3カテゴリも、自分以外の他者や社会に目を向けて、他者や社会と自分との関わりについて考察しているという共通点を見出すことができる。高井(2004)では、自己と他者の関係が多面的に捉えられるようになっていくことに、自我体験が寄与している可能性を述べており、このカテゴリの妥当性に関する論理的な裏づけともなると考えられる。また天谷(2009)では自我体験を経て積極的な意味づけをしている大学生は、そうでない人よりも孤独感(落合, 1983)の中でも「個別性」に気づいている程度が高い、つまり自分と他者との関係のあり方について「人は本来一人である」と認識している傾向が強いことを見出している。天谷(2009)における意味づけの程度は数値化された値を使用したものであるが、この結果は、自我体験を経ることで、自分以外の他者との関係

のあり方についてより考えるようになるという意味をあらわしており、この上位カテゴリの妥当性に関する客観的傍証になっている。

第3の上位カテゴリは「認知」である。この上位カテゴリは「視野の広がり」、「わからないものの存在」、「客観的視点」、「考えることが意味」の4下位カテゴリから構成されている。高井(2004)は自身の自我体験によって「メタ言語的な変化」、「認識上の変化」—記号と対象の恣意的な結びつきへの気づきが見られたとしている。また天谷(2009b)では自我体験と批判的思考との間に、Amaya(2009a)では自我体験と曖昧さへの態度との間に、Amaya(2009b)では自我体験とセルフモニタリングの間に正の関連を見出している。いずれも大学生対象の調査結果であるが、客観的な視点やあいまいさ—わからないままにしておくか否か—への態度といった一連の認知的な枠組みに自我体験が寄与していることを示している。この上位カテゴリは、これらの寄与について、自我体験を経た本人が自覚的に認識したものと位置づけることができる。

また第4の上位カテゴリは「他分野への思考」である。この上位カテゴリは「生命・人生を考える」、「脳・哲学・輪廻への興味」、「運・偶然」の3下位カテゴリから構成されている。この上位カテゴリに含まれる3つのカテゴリは、いずれも自我体験によって他の分野や事象について興味関心を抱くようになったという点で共通していると考えられる。高石(1988)は自我体験がその後の人生観や価値観に影響を及ぼす可能性を指摘しているが、この上位カテゴリはその傍証になると考えられる。1事例として、哲学者の永井(1996)は自身の自我体験と見られる問いを重く捉えて哲学者となり、永井自身の自我体験の問いに対する論考を生み出している。また自我体験が永井自身の人生における職業選択に影響を及ぼしている。

第5の上位カテゴリは便宜上「その他」とした。この上位カテゴリは「充実した日々への努力」、「感謝」、「その他」から構成されている。ポジティブな意味づけをしているものの、第4までの上位カテゴリのいずれにもあてはまらなかったものが、この第5カテゴリに含まれることとした。

また、ネガティブ・ニュートラルなカテゴリについては、その数が2、3と少数であったため、上位カテゴリを設けない方が適切であると考えられた。ネガティブな2つのカテゴリ(自己拡散、あきらめ)については、思考の内容は異なるが、アイデンティティ拡散の状態(無藤, 1979)—例えば時間的展望の刹那化や無力感・諦観などから(自分自身の人生の問題に)傾倒しないという状態—に類似したパターンが見出されたことは興味深い。またニュートラルなカテゴリの中には、人が大人に成長していく上で、誰もが通るような通過儀礼的な捉え方をするカテゴリ(「通過点」)も見出された。天谷(2002, 2004a, 2009)による調査からは、実際の自我体験の体験率は3割から半数程度にとどまっており、客観的に自我体験を経ることが発達的に「誰でも通る道」とは言えない。また自我体験の内容は、他者に開示されることが非常に少ないことが明らかとなっている(天谷, 2004a)。自我体験の内容について、他者とのやり取りをせず情報が少ない中で「自分以外の人も皆考えていることだろう」と考える人が一部存在していたことは注目に値する。自我体

験を経る深刻さや意味づけが、人によって非常にバラつきが見られる中で、この捉え方は意味づけにおける「個性」の1つと言えるだろう。

## (2) 各カテゴリに含まれた記述数とその発達の推移

各カテゴリに含まれた記述数と、割合を学校段階別に Table2 に示した。本研究の記述には同一人物の回答が複数のカテゴリに割り振られていたり、頻度がゼロのセルも存在していることから、 $\chi^2$  検定等の統計的分析を行うことができない。したがって、各セルの割合のおおよその傾向から以下に3点、考察を述べる。

Table 2. 各カテゴリの出現頻度と割合

			中学生 (%)	高校生 (%)	大学生 (%)
ポジティブ	自己	自己理解	14 (9.5)	5 (6.8)	23 (12.0)
		自己存在の実感	16 (10.9)	7 (9.6)	28 (14.7)
		自分らしさの模索	9 (6.1)	4 (5.5)	9 (4.7)
	社会・他者	自己・他者関係の理解	4 (2.7)	1 (1.4)	12 (6.3)
		進路・生き方を考える	9 (6.1)	1 (1.4)	9 (4.7)
		出合いの重視	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.0)
	認知	視野の広がり	7 (4.8)	3 (4.1)	9 (4.7)
		わからないものの存在	6 (4.1)	0 (0.0)	6 (3.1)
		客観的視点	1 (0.7)	3 (4.1)	6 (3.1)
		考えることが意味	4 (2.7)	0 (0.0)	1 (0.5)
	他分野への思考	生命・人生を考える	12 (8.2)	8 (11.0)	19 (9.9)
		脳・哲学・輪廻への興味	2 (1.4)	2 (2.7)	5 (2.6)
		運・偶然	3 (2.0)	2 (2.7)	5 (2.6)
	その他	充実した日々への努力	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.0)
		感謝	3 (2.0)	0 (0.0)	1 (0.5)
その他		27 (18.4)	16 (21.9)	7 (3.7)	
ニュートラル	通過点	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (3.1)	
	不思議さの実感	4 (2.7)	2 (2.7)	9 (4.7)	
	心身分離の意識	0 (0.0)	2 (2.7)	1 (0.5)	
	その他	8 (5.4)	8 (11.0)	6 (3.1)	
ネガティブ	自己拡散	4 (2.7)	1 (1.4)	5 (2.6)	
	あきらめ	1 (0.7)	0 (0.0)	2 (1.0)	
	その他	12 (8.2)	7 (9.6)	11 (5.8)	
ミックス	上記3つのうち2つがミックスされたもの	1 (0.7)	1 (1.4)	7 (3.7)	
合計			147	73	191

注.1 エピソードにつき複数のカテゴリがあてはまる場合があるので、合計は総データ数と一致しない

第1に、どの学校段階についても多く見られたのは(それぞれ全体の1割前後)、「自己理解」、「自己存在の実感」、「生命・人生を考える」であった。自我体験を経て、自分自身が存在しているという実感や自分の内面に興味が出てきたり、「生命」というものについて考えるようになってきたりという意味を見出すことは、発達のどの時期においても多く見られるものと考えられる。



第2に出現頻度の学校段階による違いについては、それほど明確な違いは見出されなかった。少数ではあるが、「自己・他者関係の理解」と「通過点」については、大学生には見られるものの、高校生・中学生には少数もしくは全く見られないカテゴリであった。「自己・他者関係の理解」の年少段階の少なさについては、年少の時期には自分以外の存在にまで思考を広げて考えることが難しい発達段階にあることも関連していると考えられる。「通過点」についても、自分が考えている内容が、自分にだけ特別に見られるものではないという「相対化」された視点は、青年期の後半にならなければ持てないのかもしれない。

Table 3. 各カテゴリの上位カテゴリ別の頻度と割合

		中学生 (%)	高校生 (%)	大学生 (%)
ポジティブ	自己	39 (26.5)	16 (21.9)	60 (31.4)
	社会・他者	13 (8.8)	2 (2.7)	23 (12.0)
	認知	18 (12.2)	6 (8.2)	22 (11.5)
	他分野への思考	17 (11.6)	12 (16.4)	29 (15.2)
	その他	30 (20.4)	16 (21.9)	10 (5.2)
ニュートラル	12 (8.2)	12 (16.4)	22 (11.5)	
ネガティブ	17 (11.6)	8 (11.0)	18 (9.4)	
計		147	73	191

注.1 エピソードにつき複数のカテゴリがあてはまる場合があるので、合計は総データ数と一致しない

第3に、上位カテゴリ別にまとめられた Table3 からは、「自己」の上位カテゴリが割合としてはやや多いことが指摘できる。自我体験により、自我体験で問われる「私」という水準以外の様々な「自己」について意識するようになる割合が多いことがうかがえる。さらにその傾向は、学校段階による違いはあまり見られないことも指摘できる。

### 【まとめ・今後の課題】

本研究の分析により、自我体験を経た意味づけの具体的内容が明らかにされた。「その他」を除くカテゴリとしてポジティブなものが15カテゴリ、ネガティブなものが2カテゴリ、ニュートラルなものが3カテゴリ見出された。ポジティブなカテゴリについては、さらに5つの上位カテゴリ「自己」、「社会・他者」、「認知」、「他分野への思考」、「その他」にまとめられた。それぞれの上位カテゴリの妥当性について、既存の理論的または実証的知見と照合せながら議論された。各カテゴリの出現割合として多かったのは「自己理解」、「自己存在の実感」、「生命・人生を考える」のカテゴリであった。また学校段階による出現割合の推移に大きな変化は見られない結果となった。ただ、少ないながらも自己と他者の関係について改めて考えること、「通過点」と捉えることについては大学生の時期に至るまではあまり見られない可能性が示唆された。自我体験を経ることにより、自我体験に見られる問いに答えは存在しないが、自己のみならず、自己・他者関係や他分野への興味の広がり、認知的な変化といった点にも影響を及ぼす可能性が考えられる。

今後の課題として、以下に3点を述べる。第1にカテゴリの妥当性の検討が挙げられる。特に問題点として、「その他」の出現頻度の高さが挙げられる。それは学校段階が下がるほど多くなる傾向が見られた。本研究では、まず大学生の記述の一部からカテゴリ生成の作業を行った。それにより、大学生の記述に関しては各カテゴリにうまくあてはまるが、他の学校段階にはあてはまらないカテゴリ群を生成してしまったということが考えられる。今後は、中学生の「その他」の具体的内容を分析し、新しいカテゴリ生成が必要か否かを吟味する必要がある。また出現頻度が少数であったカテゴリについては「その他」に吸収させてしまう方が適切な場合も挙げられる。今後別のデータを使用してあてはまりの良さを再確認する必要がある。また、本研究の分析データは古いデータを使用したので、最近のデータでもう一度確認する必要性もある。

第2に、「わからない」、「意味はない」とするものを含めた検討が必要であるということである。天谷(2002)では60名中12名しか主観的变化を見出していないことが明らかとなっている。つまりそれ以外の人にとっては、自身の自我体験に対して(少なくとも主観的な)意味を見出してはいない。自身の自我体験に意味があったとみなす人や、深刻に自我体験を捉える人にとっては、自身の自我体験の意味づけを行うことは非常に重要である。しかし、そうでない人を含んだ上での多面的な考察や、調査方法を変更した上での意味づけの検討が必要となるだろう。

第3に、自我体験を経た本人による主観的な(自覚的な)意味づけだけではなく、自我体験の意味づけの客観的な検証が望まれる。本研究は自我体験を経た本人による主観的な意味づけの内容を中心として考察を行ってきたが、それをより一般化し、自覚的でない人にとっても同様の意味づけまたは変化が見られるのか否かを実際に検証することが必要となってくる。以上のような課題を今後も検討したうえで、自我体験を経ることによる発達の意味づけを明らかにしていくことが望まれる。

#### 【文献】

- 天谷祐子 2001 自我体験に関する縦断研究—小学校高学年生・中学1年生を対象として 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 48, 97-106.
- 天谷祐子 2002 「私」への「なぜ」という問いについて: 面接法による自我体験の報告から 発達心理学研究, 13, 221-231.
- 天谷祐子 2004a 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い—自我体験—の検討 発達心理学研究, 15, 356-365.
- 天谷祐子 2004b 自我体験に関する縦断面接調査—3年後の報告 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 51, 51-62.
- 天谷祐子 2005 自己意識と自我体験—「私」への「なぜ」という問い—の関連 パーソナリティ研究, 13, 197-207.
- 天谷祐子 2009a 自我体験とパーソナリティ特性・孤独感との関連—「私はなぜ私なのか」と問う取り組み

- 方による違い パーソナリティ研究, 18, 46-56.
- 天谷祐子 2009b 自我体験と批判的思考の関連 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 138.
- Amaya, Y 2009a The Contribution of an “Ego-experience” To Attitudes Towards Ambiguity and the Negative Rumination Trait Society for Research in Child Development 2009 biennial meeting (poster).
- Amaya, Y 2009b The Contribution of an “Ego-experience”: To Openness-closedness of personality and the cognitive behavioral self monitoring XIV European Conference on Developmental Psychology (poster).
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- 永井 均 1996 <子ども>のための哲学 講談社
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究, 31, 60-64.
- 菅野幸恵・岡本依子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗香・高橋千枝・八木下(川田) 暁子 2009 母親は子どもへの不快感情をどのように説明するか：第1子誕生後2年間の縦断的研究から 発達心理学研究, 20, 74-85.
- 高井弘弥 2004 9 発達心理学から見た自我体験(Pp.195-213) 渡辺恒夫・高石恭子(編) <私>という謎—自我体験の心理学 新曜社
- 高石恭子 1988 青年期の自我発達と自我体験について 京都大学教育学部紀要, 34, 210-220.